対人場面における服装の違いが緊張感及び生理指標に与える影響について

心理学科 09h*p*245 和田 飛馬
(指導教員:長野 祐一郎)

キーワード:対人場面, 服装, ストレス, 自律神経系反応

序と目的

田村(2003)は、被服は、視覚などを通じて伝えられた「沈黙の言葉」の一部であると述べており、服装は個人を装飾するための道具だけでなく、印象形成のための重要な材料となりえると言えるだろう。さらに、アメリカの社会心理学者Bickman(1974)は、服装がフォーマルかカジュアルかによって、相手の反応に差があることを実験的に示した。就職活動などの面接場面では、一般に面接者はスーツを着用している。こういった服装は被面接者に緊張を与えるだろう。

しかし、これらの服装が与える影響に関する研究は、質問紙研究が中心で、行動・生理指標を扱った研究は数が少ない。そこで本研究では、スピーチ課題を用いて、面接者の服装がフォーマルであるか、カジュアルであるかによって、緊張感及び生理指標にどのような影響が現れるか検討した。

方法

実験参加者 大学生24名(平均19.75歳,*SD*=3.27)。

群配置 スピーチ課題中の面接者の服装によって、フォーマル群とカジュアル群を設けた。フォーマル群では黒のスーツに黒のシャツ、クリーム色のネクタイを着用し、カジュアル条件では白のTシャツに赤のパーカー、黒のジーンズを着用した。なお、スピーチ中以外は白衣を着用した。

課題 課題は3分間のスピーチ課題を用いた。スピーチのテーマは敦賀・鈴木(2005)を参考に、「これまでの大学生活を振り返る」「高校時代一番の思い出」「大学の講義で最も好きなものとその魅力について」の3つから選択させた。

心理指標 「抑鬱・不安」「敵意」「倦怠」「活動的快」「非活動的快」「親和」「集中」「驚愕」の下位尺度からなる、多面的感情状態尺度(寺崎・古賀・岸本, 1992)短縮版を使用した。

生理指標 心拍(HR),皮膚コンダクタンス(SC),指尖血流量(BF)の3つの自律神経系反応成分を用いた。

手続き 計測スケジュールは、前安静4分、思考期2分、スピーチ期3分 、後安静期4分であった。心理指標は、計測開始前、後安静期の後に評定した。

結果

各主観感情尺度を従属変数とし、群(カジュアル・フォーマル)×期間(前安静期・スピーチ期)の2要因混合計画による分散分析をした結果、非活動的快で、期間の主効果が有意だった($F(2,22)=6.66, p<.05$)。それ以外に関しては、群の効果も期間の効果も、交互作用も有意ではなかった。

次に各生理指標に関し、群(フォーマル群・カジュアル群)×期間(前安静期・思考期・スピーチ期・後安静期)の2要因混合計画による分散分析を行った。その結果、HRでは期間の主効果のみ有意だった($F(3,63)=36.10, p<.001$)。TukeyのHSD法による多重比較を行った所、前安静期と思考・スピーチ期の間、思考・スピーチ期と後安静期の間に有意な差が見られた。SCに関しては、群の主効果($F(1,21)=6.39, p<.05$)、期間の主効果($F(3,63)=15.05, p<.001$)が有意であった。同様に多重比較を行った所、前安静期と思考・スピーチ期の間、思考・スピーチ期と後安静期の間に有意な差が見られた。BFに関しては、期間の主効果($F(3,63)=22.50, p<.001$)は有意であった。そこで多重比較を行った所、前安静期と思考・スピーチ期の間、思考・スピーチ期と後安静期の間に5%水準で有意な差が見られ、さらに、思考期とスピーチ期の間の差が有意傾向であった($p<.10$)。

考察

主観的な感情の変化については、非活動的快に関してのみ、スピーチ期において有意な低下みられたが、概して感情の変化は小さめであった。原因として、ストレス負荷が足りなかった可能性が挙げられる。内省報告では、課題中の緊張状態について、ほとんどの実験参加者が「割と」や「まあまあ」などの回答を行っていたことからも、それがうかがえる。

生理指標に目を向けると、いずれの指標においても、思考期及びスピーチ期において、有意な変化を示した。具体的にはHR・SCは有意に上昇し、BFは有意に低下した。これらはいずれも、交感神経活動の亢進を反映したものであると考えられた。ただし、群の効果はSCにおいてのみ見られ、他の指標においては有意な差を見いださなかった。その原因として、実験参加者が各群12名ずつと少なかったため、個人差が残ってしまった可能性が考えられた。

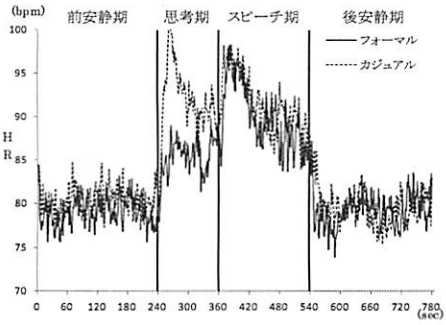

図1 各群におけるHRの変化

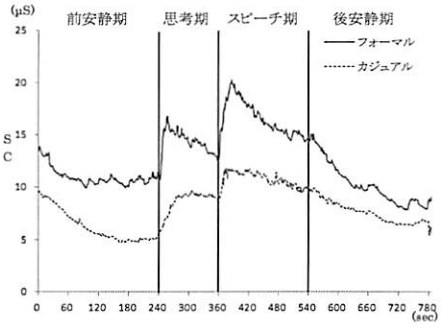

図2 各群におけるSCの変化

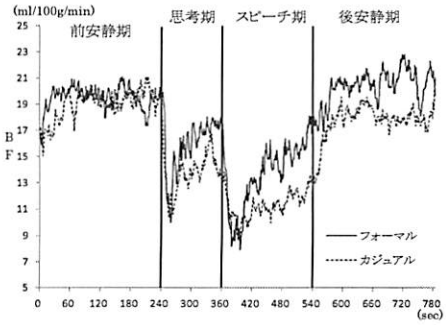

図3 各群におけるBFの変化

対人場面における服装の違いが緊張感及び生理指標に与える影響について

学籍番号　09HP245

氏名　和田　飛馬

指導教員　長野　祐一郎

序と目的

服装は我々の生活に必要不可欠なものであり、その果たす役割は大きい。今日までに、多様な状況や個性に合わせて様々な服装が用いられている。そして日常的に我々は、服装に対して注意を向けている。それによって我々は、服装から様々な情報を読み取っている。例えば、Kaiser(1994)は一般的に、フォーマルなもの、カジュアルなもの、あるいはその中間として受け入れられている被服スタイルは、特定の状況を定義するのに有用な方法となる傾向があると述べている。また、我々は服装から相手の印象を読み取ることもできる。様々な印象を受けて、相手への印象を形成している。例えば、スーツを着て、ネクタイを上までしっかりと締めた人物は真面目な印象を与えるだろうし、アロハシャツにハーフパンツといった服装の人物は、陽気そうな印象を与えるだろう。

田村(2003)は、被服は、視覚などを通じて伝えられた「沈黙の言葉」の一部であると述べており、服装は個人を装飾するための道具だけでなく、印象形成のための重要な材料となりえると言えるだろう。こういった服装の印象によって、我々はコミュニケーションが左右されることもある。藤原・多久・西藤・木村・林・宇野・近藤・家本・中村(1996)は、4つの場面を設定し、その場面において着用される服装の派手/地味あるいは、フォーマル/カジュアルの評価と、生起される感情との関連について質問紙を用いて検討した。その結果、圧迫、緊張は会社訪問の場面において、特に地味と評価される服装の時、顕著に生起し、フォーマルな服装では、充実、優越といった感情が、カジュアルな服装では快活、爽快、安らぎといった感情が生起され、圧迫、緊張はあらたまった場面でフォーマルと評価される服装の時に誘発されることが分かったと述べている。神山・苗村・馬杉(1995)は、服装メッセージ評定尺度を用いて、基本的な服装スタイルが伝える情報内容を測定し、それらの検討を行った。その結果、服装イメージと服装メッセージとの間には明確な対応性が認められた。

アメリカの社会心理学者 Bickman(1974)は、電話ボックス内の目に付きやすい場所に金銭を置き、電話を行った人物に対してそれが置いてあったかどうか尋ねるという実験を行った。その結果、あったと返答されたのは、スーツであった場合の方が、肉体労働者風の格好であった場合よりも多かった。これは服装がフォーマルかカジュアルかによって、相手の反応に差があることを示唆している。よって対人場面において、服装は印象を左右する要因となりえるだろうと思われる。加藤・雨宮・橋本(2004)は、被服の配色が着用者に及ぼす影響を検討するため、プロジェクタを用い、実験参加者の服装を、配色を変えて 15 パターン提示し、その際の心拍と脳波を計測する実験を行った。その結果、服の配色における、活動性が及ぼす生理作用は異なることがあきらかになったと述べている。服装が与える影響に関する研究は、藤原ら(1996)や神山ら(1995)などの質問紙研究が中心で、質問紙以外の研究としては、Bickman(1974)の実験などのような行動観察ある。生理指標を扱った研究は、加藤ら(2004)の実験があるが、その数は少ない。就職活動などでの面接場面では、一般的に面接者はフォーマルなスーツを着用している。こういった服装は被面接者に緊張を与えるだろう。藤原ら(1996)はフォーマルな格好の方が、カジュアルな格好よりも圧迫、緊張の得点が高く、日常場面でもフォーマルと評価される服装では「堅苦しい」「きゅうくつ」で「緊張した」感情が生起されると述べている。すでに緊張場面である面接場面で、さらに服装によって緊張が高まると被面接者は本来の力を発揮できず、面接者は正しくその人物を評価することが難しくなるのではないか。また、フォーマルな格好が緊張を高めるのであれば、面接者がカジュアルな格好をすることで緊張を緩和し、被面接者の本来の力を引き出し、正しく評価することが出来るのではないだろうか。

本研究では緊張などのストレス反応を詳細に測定するためには、生理指標を用いるのが妥当であると判断した。敦賀、鈴木(2003)は、スピーチを、もっとも日常的な“あがり”喚起場面であり、またこれまでに多くの精神生理学的反応に関する知見が蓄積されている課題と述べている。そのためスピーチは、日常的に起こりうる緊張を測る課題として妥当であると判断できる。また、スピーチを行う際の聴者の服装はフォーマルでもカジュアルでも日常的にあり得るため、どちらの場合も問題なく行うことが出来る。そこで本研究では、スピーチ課題を用いて、面接者の服装がフォーマルであるか、カジ

ュアルであるかによって、緊張感及び生理指標にどのような影響が現れるか検討した。

方法

実験参加者

大学生 24 名(男性 13 名、女性 11 名、18 歳から 32 歳の平均年齢 19.75 歳,*SD*=3.27)を対象とした。

群の設定

スピーチ課題中の面接者の服装によって、フォーマル群とカジュアル群を設けた。フォーマル群では黒のスーツに黒のシャツ、クリーム色のネクタイを着用し、カジュアル条件では白の T シャツに赤のパーカー、黒のジーンズを着用した。靴は黒で統一した。なお、スピーチ中以外は白衣を着用した。

フォーマル条件　　カジュアル条件

図1　面接者の服装

実験計画

群(フォーマル群、カジュアル群)×期間(前安静期、思考期、スピーチ期、後安静期)の 2 要因混合計画であった。

課題

課題は 3 分間のスピーチ課題を用いた。スピーチのテーマは敦賀・鈴木(2005)を参考に、「これまでの大学生活を振り返る」「高校時代一番の思い出」「大学の講義で最も好きなものとその魅力について」の 3 つから選択させた。

心理指標

スピーチによる感情状態の変化を測る指標として、多面的感情状態尺度(寺崎・古賀・岸本,1992)の短縮版　を使用した。本尺度は、「抑鬱・不安」「敵意」「倦怠」「活動的快」「非活動的快」「親和」「集中」「驚愕」の 8 つの下位尺度によって構成されている。また、服装に関する印象を測るために、加藤ら(2004)の被服の配色が着用者に及ぼす心理・生理的影響の研究を元に作成した尺度を用いた。(表 1)

表1 服装に関する尺度の質問項目

1 不快な-快適な
2 親しみにくい-親しみやすい
3 不調和な-調和な
4 くつろげない-くつろぐ
5 嫌いな-好きな
6 下品な-上品な
7 あっさり-くどい
8 落ち着かない-落ち着いた
9 平凡な-個性的な
10 暖かな-涼しげな
11 暗い-明るい
12 地味な-派手な
13 大人っぽい-若々しい
14 非活動的な-活動的な
15 気が沈む-気が晴れる
16 疲れる-元気が出る

生理指標

心拍数(Heart Rate:HR,b*p*m)、皮膚コンダクタンス(Skin Conductance:SC,μS)、指尖血流量 (Blood *F*low:BF,ml/100g/min)の3つを使用した。HRは長野(2011)に準じた心電図アンプを用い、第II誘電法電極配置より測定した(計装アンプ LT1167;低消費電力オペアンプ LT1112,Linear Technology)。HR 計測に用いた電極はディスポ電極 *F*-ビトロード(*F*-150M,NIHON KOHDEN)であった。SC は皮膚コンダクタンス測定装置(DA-3,VEGA SYSTEM 製)によって非利きの第四指第二節および第五指第二節より測定した。SC 計測に用いた電極はディスポ電極 *F*-ビトロード(*F*-150S,NIHON KOHDEN)であった。BF はレーザードップラー血流計(オメガウェーブ製 オメガフロー*F*LO-C1)によって非利き手第二指の末節より測定した。いずれの生理指標も1秒間隔で測定を行い、コンピューターに記録した。

実験機器および実験者、実験参加者は図2のように配置した。

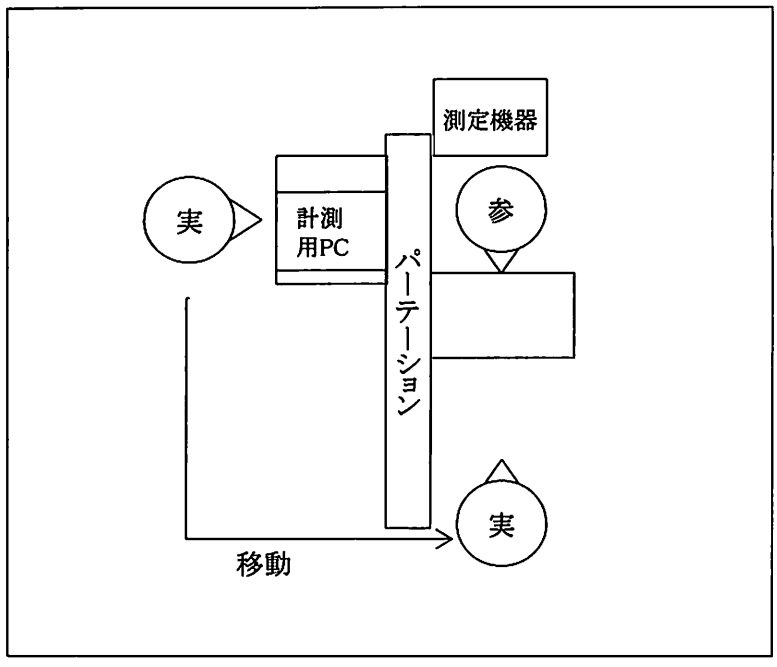

図2 計測機器及び実験者、実験参加者の配置

手続き

まず、実験参加者にインフォームドコンセントを取り、実験参加への承諾を取った。次に安静期の多面的感情状態尺度に回答を求めた。本実験はスピーチ課題を用い、安静期 4 分、思考期 2 分、スピーチ期 3 分、安静期 4 分で構成されていた。また、実験参加者に実験者の服装がわかるよう、出来るだけ実験者の方を見てスピーチを行うよう教示した。教示後、測定機器を実験参加者に装着し、実験を開始した。思考期は 2 分間、スピーチ内容を考える時間とし、残りの 3 分間にスピーチを行わせた。スピーチ内容を考える際には評価用紙とメモ用紙（課題の 3 つのテーマが書かれたもの）を実験参加者に渡し、スピーチのテーマはメモ用紙に書かれている 3 つのうちからひとつ選択させた。スピーチ中に黙ってしまった場合には「○○について詳しく教えて下さい」、「○○とはどのようなものですか」などの質問項目を用い、発話を促した。

スピーチ開始時には実験者は実験参加者の前に着席した。その際、実験者との距離は 2m とした。課題終了後、課題時の気持ちを答えるよう教示を行った上で、多面的感情状態尺度と服装に関する尺度へ回答を求めた。全ての実験スケジュールが終了した後、内省報告をとった。以上の実験スケジュールを図 3 に示した。

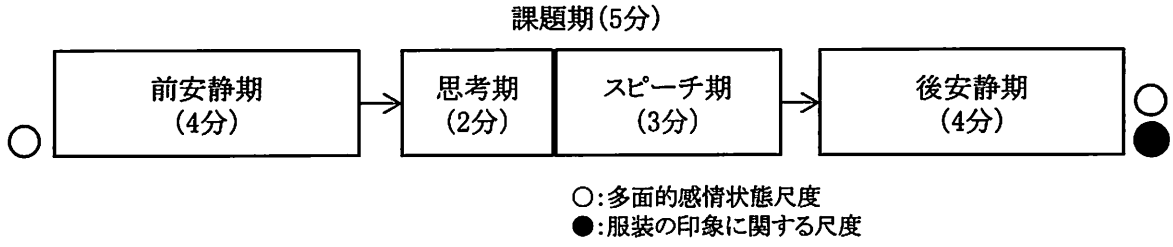

図3 計測スケジュール

結果

服装の印象に関する尺度における各項目の群ごとに平均値を算出したものを図4に示した。

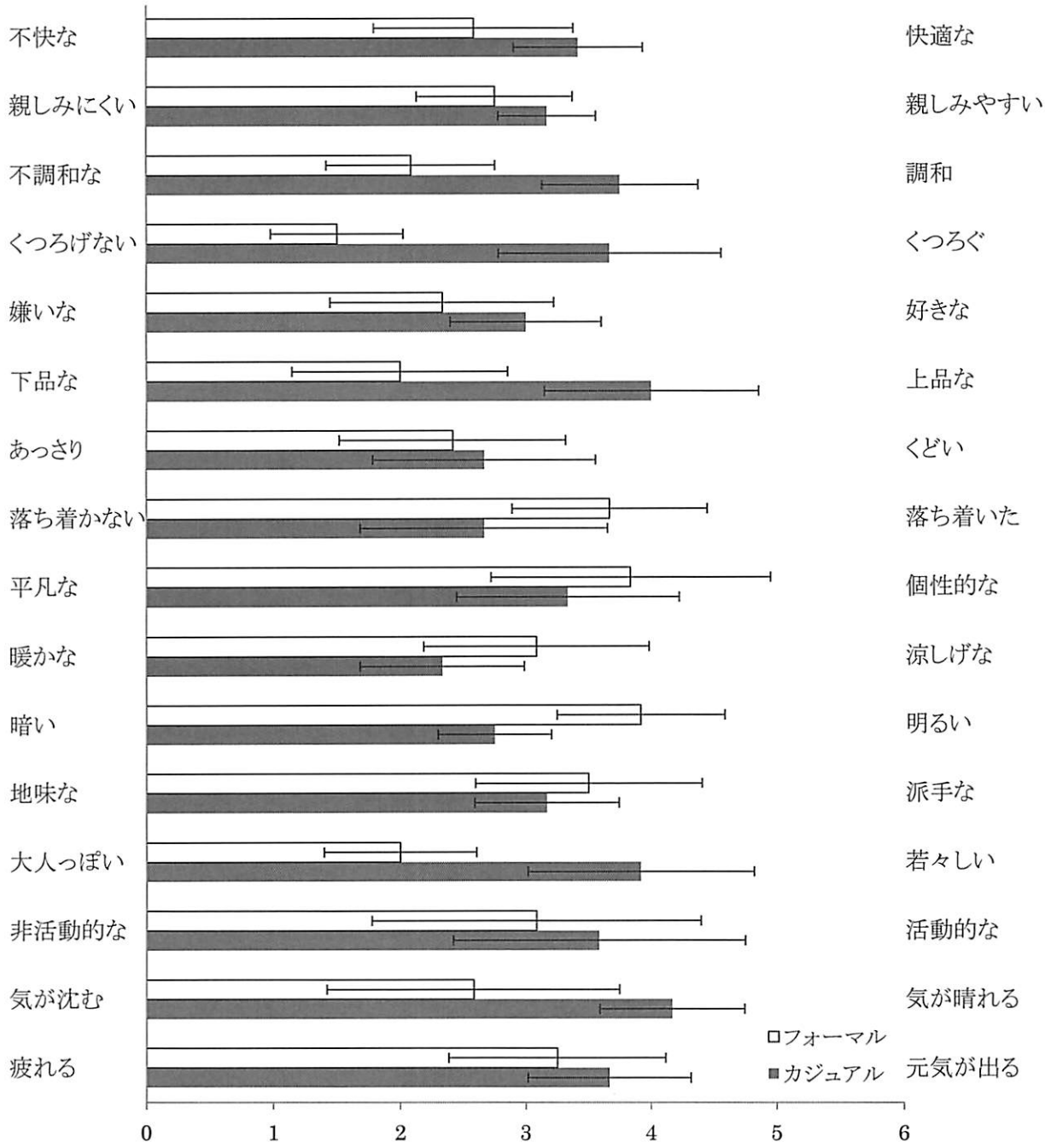

図4 服装に関する尺度の各群の平均

服装に関する尺度の得点は快適な、親しみやすい、調和、くつろぐ、好きな、くどい、若々しい、活動的な、気が晴れる、元気が出るといった項目ではフォーマル群よりカジュアル群の方が高かった。一方で、落ち着いた、個性的な、涼しげな、明るい、派手なといった項目ではカジュアル群よりフォーマル群の方が高かった。

服装に関する尺度についてt検定を行ったところ、あっさり-くどい($t(22)=2.34, p<.05$)、

平凡な-個性的な（t（22）=2.76,p<.05）、地味な-派手な（t（22）=2.15,p<.05）、親しみにくい-親しみやすい（t(22)=4.22,p<.01）、くつろげない-くつろぐ（t(22)=6.13,p<.01）、下品な-上品な（t（22）=5.01,p<.01）、 暗い-明るい（t（22）=5.74,p<.01）、大人っぽい-若々しい（t（22）=7.29,p<.01）、非活動的な-活動的な（t（22）=6.32,p<.01）、疲れる-元気が出る（t（22）=3.05,p<.01）において有意な差が見られた。不快な-快適な（t（22）=1.33,$n.s$）、不調和-調和（t（22）=0.99,$n.s.$）、嫌いな-好きな（t（22）=1.08,$n.s.$）、落ち着かない-落ち着いた（t（22）=1.22,$n.s.$）、暖かな-涼しげな（t（22）=0.68,$n.s.$）、気が沈む-気が晴れる（t（22）=1.97,$n.s.$）は有意ではなかった。つまり、これらの結果は両群の印象が目的に即したものとなっていたことを示している。また、嫌いな-好きな項目から、実験参加者の服装に対する個人的な嗜好が反映されていないと考えられるだろう。

各期間における多面的感情状態尺度の合計尺度得点を平均化し、下位因子を群ごとに算出したものを図 5 に示した。

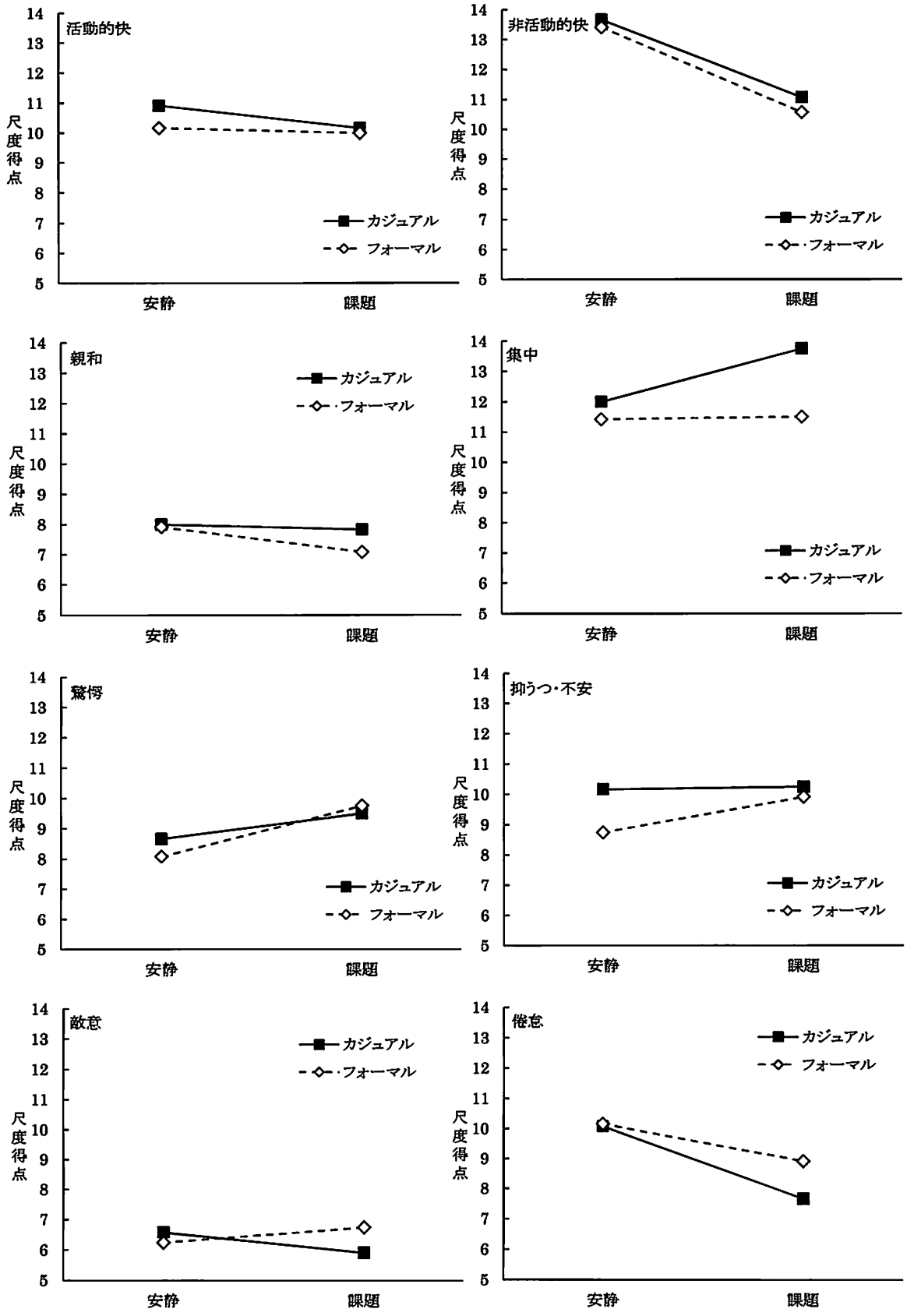

図5 多面的感情状態尺度の各下位得点の平均点

活動的快得点は、安静期およびスピーチ期においてカジュアル群のほうがフォーマル群より高く、両群とも安静期から課題にかけて低下した。活動的快得点を従属変数とし、群（カジュアル・フォーマル）×期間（前安静期・スピーチ期）の2要因混合計画による分散分析を行った結果、群の主効果（$F(1,22)=0.15$, *n.s.*）、期間の主効果（$F(1,22)=0.46$, *n.s.*）、群×期間の交互作用（$F(1,22)=0.19$, *n.s.*）は有意ではなかった。つまり、両群において活動的快得点は各期間で変化したように見受けられたが、すべての期間を通して有意な変化は見られず、群の効果も見られなかった。

非活動的快得点は、両群ともに安静期からスピーチ期にかけて得点が低下した。非活動的快得点を従属変数とし、同様に分散分析を行った結果、期間の主効果が有意であった（$F(1,22)=6.66$, $p<.05$）。群の主効果（$F(1,22)=0.17$, *n.s.*）および群×期間の交互作用（$F(1,22)=0.08$, *n.s.*）は有意ではなかった。つまり、非活動的快はスピーチ期で有意に低下するものの、群による変化の仕方に違いはみられないことが示された。

親和得点は、カジュアル条件のみ安静期からスピーチ期にかけて低下し、フォーマル群は変化しなかった。親和得点を従属変数とし、同様に分散分析を行った結果、群の主効果（$F(1,22)=0.19$, *n.s.*）、期間の主効果（$F(1,22)=0.79$, *n.s.*）、群×期間の交互作用（$F(1,22)=0.79$, *n.s.*）は有意ではなかった。つまり、両群において驚愕得点は各期間で変化したように見受けられたが、すべての期間を通して有意な変化は見られず、群の効果も見られなかった。

集中得点は、両群ともに安静期からスピーチ期にかけて上昇した。フォーマル群よりもカジュアル群の方が大きく変化した。集中得点を従属変数とし、同様に分散分析を行った結果、群の主効果（$F(1,22)=1.50$, *n.s.*）、期間の主効果（$F(1,22)=2.30$, *n.s.*）、群×期間の交互作用（$F(1,22)=1.90$, *n.s.*）は有意ではなかった。つまり、両群において驚愕得点は、すべての期間を通して有意な変化は見られず、群の効果も見られなかった。

驚愕得点は、安静期においてカジュアル群のほうがフォーマル群より高く、両群とも安静期から課題にかけて上昇し、課題期において逆転した。驚愕得点を従属変数とし、同様に分散分析を行った結果、群の主効果（$F(1,22)=0.05$, *n.s.*）、期間の主効果（$F(1,22)=0.18$, *n.s.*）、群×期間の交互作用（$F(1,22)=0.00$, *n.s.*）は有意ではなかった。つまり、両群において驚愕得点は各期間で変化したように見受けられたが、すべての期間を通して有意な変化は見られず、群の効果も見られなかった。

抑鬱・不安得点は、フォーマル群と比べ、カジュアル群の方が高く、両群共に安静期からスピーチ期にかけて低下した。抑鬱・不安の尺度得点を従属変数として、同様に分散分析を行った。その結果、群の主効果（$F(1,22)=0.04$, *n.s.*）、期間の主効果（$F(1,22)=0.25$, *n.s.*）、群×期間の交互作用（$F(1,22)=0.25$, *n.s.*）は有意ではなかった。つまり、両群において驚愕得点は各期間で変化したように見受けられたが、すべての期間を通して有意な変化は見られず、群の効果も見られなかった。

敵意得点は、安静期からスピーチ期にかけて、カジュアル条件では低下し、フォーマル条件では上昇した。敵意得点を従属変数とし、同様に分散分析を行った結果、群の主効果（$F(1,22)=0.07$, *n.s.*）、期間の主効果（$F(1,22)=0.98$, *n.s.*）、群×期間の交互作用（$F(1,22)=2.93$, *n.s.*）は有意ではなかった。つまり、両群において驚愕得点は各期間で変化したように見受けられたが、すべての期間を通して有意な変化は見られず、群の効果も見られなかった。

倦怠得点に関しては、両群ともに安静期からスピーチ期にかけて低下した。また、カジュアル群の方が大きく低下したように見受けられた。倦怠を従属変数として同様の分散分析を行った結果、群の主効果（$F(1,22)=0.08$, *n.s.*）、期間の主効果（$F(1,22)=3.60$, *n.s.*）、群×期間の交互作用（$F(1,22)=0.14$, *n.s.*）は有意ではなかった。つまり、両群において驚愕得点は各期間で変化したように見受けられたが、すべての期間を通して有意な変化は見られず、群の効果も見られ

なかった。

次に、HR について、平均値を算出し群ごとの推移を図 6 に示した。

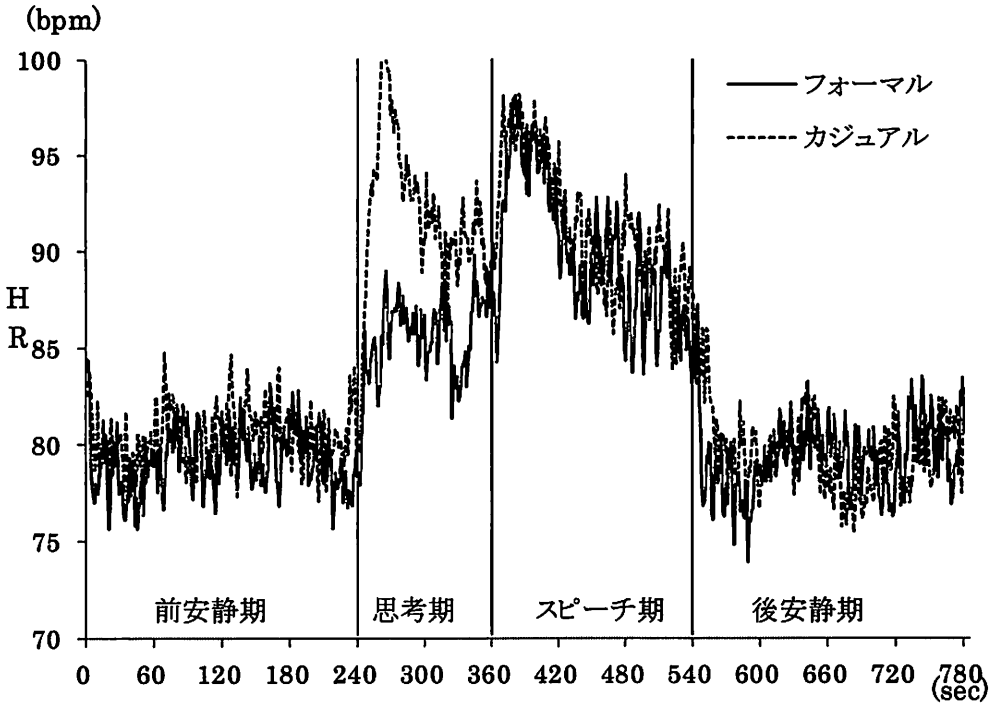

図6 各群におけるHRの変化

両群において、前安静期から思考期、スピーチ期にかけて HR は上昇し、後安静期で下降した。また、思考期において、カジュアル群の方がフォーマル群より高かった。

HR を従属変数として、群（フォーマル群・カジュアル群）×期間（前安静期・思考期・スピーチ期・後安静期）の 2 要因混合計画による分散分析を行った。その結果、期間の主効果のみ有意であった（F（3,63）=36.10,p<.001）。群の主効果（F（1,21）=0.23,*n.s.*）および群×期間の交互作用（F（3,63）=2.00,*n.s.*）は有意ではなかった。期間の主効果が有意であったため、Tukey の HSD 法による多重比較を行った所、前安静期と思考・スピーチ期の間、思考・スピーチ期と後安静期の間に有意な差が見られた(いずれも p<.05)。

つまり、HR は思考・スピーチ期の間で上昇したが、群による差は見られなかった。

SC について、平均値を算出し群ごとの推移を図 7 に示した。

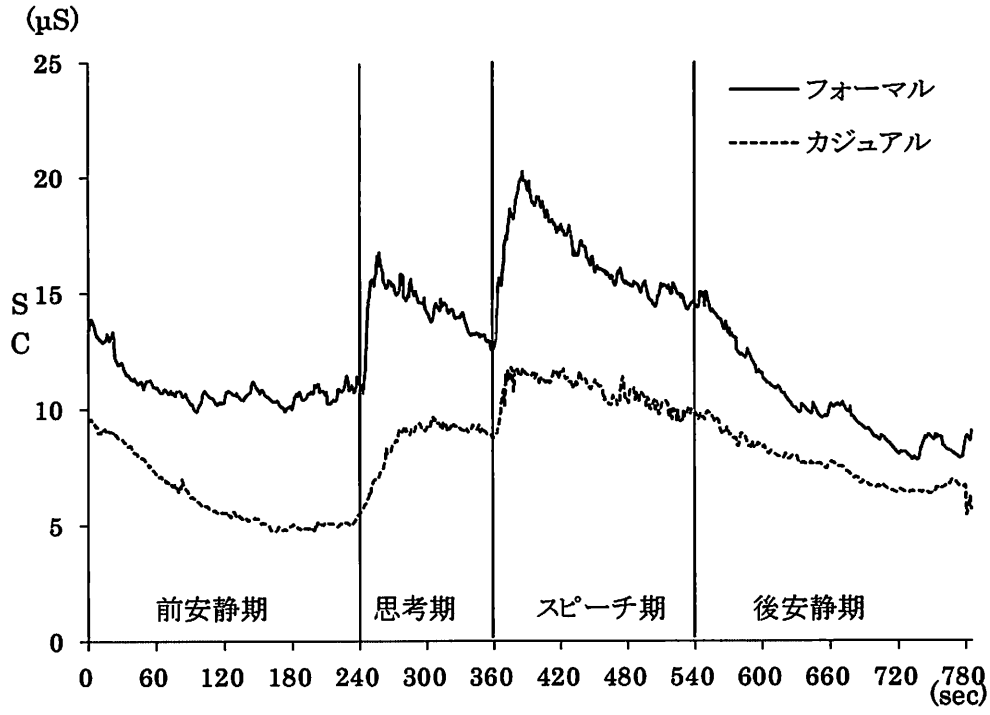

図7 各群におけるSCの変化

両群において、前安静期からスピーチ期にかけて SC は上昇し、後安静期で下降した。また、すべての期間を通してフォーマル群の SC がカジュアル群より高かった。

SC を従属変数として、同様に分散分析を行った。その結果、群の主効果（F（1,21）=6.39,p<.05）、期間の主効果（F（3,63）=15.05,p<.001）が有意であった。群×期間の交互作用（F（3,63）=2.09,*n.s.*）は有意ではなかった。期間の主効果が有意であったため、Tukey の HSD 法による多重比較を行った所、前安静期と思考・スピーチ期の間、思考・スピーチ期と後安静期の間に有意な差が見られた(いずれも p<.05)。つまり、SC は思考・スピーチ期の間で上昇したが、全ての期間を通してカジュアル群をフォーマル群が上回った。

BF について、平均値を算出し群ごとの推移を図 8 に示した。

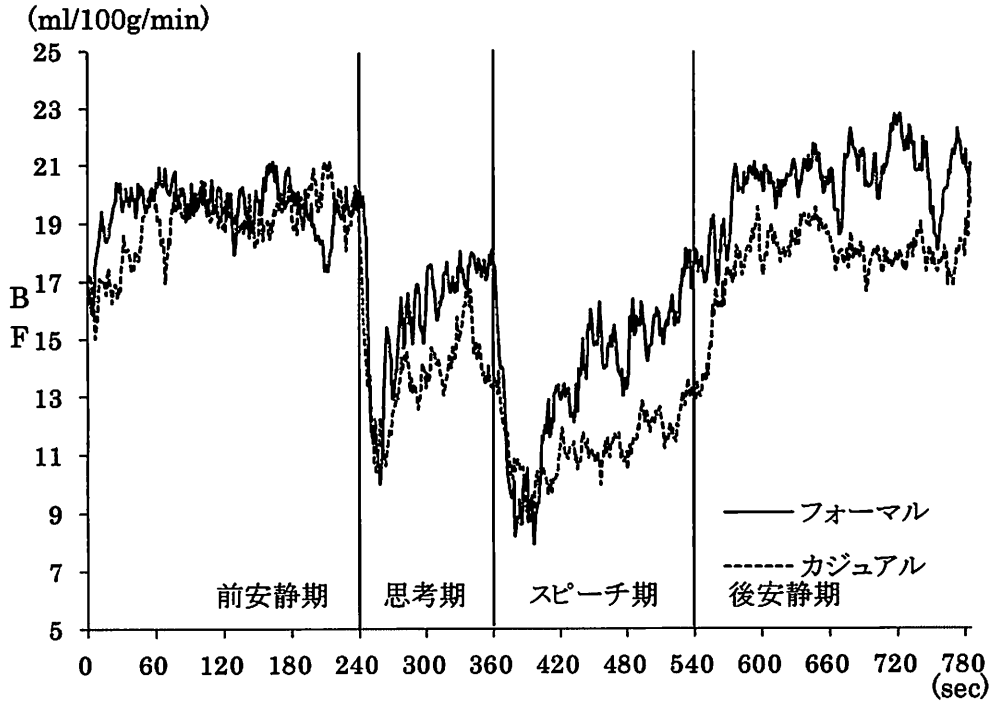

図8 各群におけるBFの変化

両群において、前安静期からスピーチ期にかけて BF は下降し、後安静期で上昇した。また、思考期から後安静期にかけて、カジュアル群に比べ、フォーマル群の方が高かった。

BF を従属変数として、同様に分散分析を行った。その結果、期間の主効果（F（3,63）=22.50,p<.001）は有意であった。群の主効果（F（1,21）=0.01,*n.s.*）、群×期間の交互作用（F（3,63）=0.06,*n.s.*）は有意ではなかった。期間の主効果が有意であったため、Tukey の HSD 法による多重比較を行った所、前安静期と思考・スピーチ期の間、思考・スピーチ期と後安静期の間に 5%水準で有意な差が見られ、さらに、思考期とスピーチ期の間の差が有意傾向であった(p<.10)。つまり、BF は思考期とスピーチ期で有意に低下したが、群による差は見られなかった。

考察

本研究では、対人場面における相手の服装がカジュアルであった場合と、フォーマルであった場合の心理指標及び生理指標の違いについて、検討することを目的とした。服装に関する尺度によると、フォーマル群の方が親しみにくく、疲れ、くつろげないという結果が得られた。よって実験者の服装の操作は適切であったと考えられるだろう。ストレス負荷に関しては、スピーチ期における明確な HR・SC の上昇、BF の下降が認められた。したがって、本研究で用いたスピーチ課題は一定の負荷を生じていたことが確認できた。

次に主観的な感情の変化について、詳細に検討を行うと、非活動的快に関し、スピーチ期において有意な低下が認められたものの、その他の尺度に関しては、いずれも有意な変化が認められなかった。ストレス課題を行う際は、通常抑うつ・不安や驚愕において、上昇が見られるが、本研究では有意な変化は認められなかった。その原因として、以下のことが考えられるだろう。まず、実験後の内省報告によると、緊張したかどうか尋ねた時、ほとんどの実験参加者が「割と」や「まあまあ」などの、あまり緊張が高くなかったことを示す回答を行っていたため、これによりストレス負荷が足りなかった可能性が挙げられる。しかし、ストレス負荷をかけすぎると服装による効果が埋もれてしまう可能性もあるため、課題の負荷の調整は慎重に行う必要があるだろう。また、いずれの下位尺度においても、服装の効果は有意ではなかった。したがって、本研究で用いた服装はスピーチ課題中の感情に影響を与えるほどの効果を持っていなかった可能性が考えられた。

さらに、生理指標に目を向けると、いずれの指標においても、思考期及びスピーチ期において、有意な変化を示した。具体的には HR・SC は有意に上昇し、BF は有意に低下した。これらはいずれも、交感神経活動の亢進を反映したものであると考えられた。したがって、本研究で課したスピーチ課題は、生体にストレス負荷を与えていたと考えられた。ただし、群による効果は SC においてのみ見られ、他の指標においては有意な差を見いださなかった。その原因として、実験参加者が各群 12 名ずつと少なかったため、個人差が残ってしまった可能性が考えられる。また、SC で見られた、群の効果に関しては、本来同じ程度でなければならない安静期から明らかに差が出てしまっている。これは服の上から白衣を着用することで安静期を統制しようとしたが、フォーマル群において、襟元からネクタイが見えていたため、それにより緊張感が高まり、SC が上昇してしまった可能性が考えられる。したがってフォーマル群における高い SC は実験者が意図した服装の効果とは言い切れないかもしれない。服装を取り扱った実験を行う場合は、課題の前に服装の影響が現れないように、実験者と服装を操作した面接者を分けて用意する必要があるだろう。

また、服装に関して、普段どの程度相手の服装を意識しているかなどの質問項目を設けて、日常場面における服装への意識を測るべきだったかもしれない。さらに、本研究では男女差を考慮しなかったが、男女の服装に関する意識の違いも考慮すべきだったかもしれない。

引用文献

Bickman, L. 1974 Social Roles and Uni*F*orms：Clothes Make The *P*erson *P*sychological Today 7 No.11 A*p*ril *pp*49-51
濱田勝宏 2007 服装社会学と社会学(1) 文化女子大学紀要. 服装学・造形学研究 38 (20070100) *pp*.25-37
濱田勝宏 2009 服装社会学と社会学(2) 文化女子大学紀要. 服装学・造形学研究 40 (20090100) *pp*.73-78
神山進 1985 被服心理学 光生館 *pp*53-63
加藤雪枝・雨宮勇・橋本令子 2004 被服の配色が着用者に及ぼす心理的・生理学的影響 日本家政学会誌,55,7,541-550.
中川由理・髙木修 2008 社会的スキルが対人関係場面における被服選択と着装感情に及ぼす影響 —ACT とネットワーク調整スキル、被服による印象管理に着目して— 日本社会心理学会第 49 回大会 対人関係場面における被服選択に及ぼす影響
Susan B.Kaiser 1994 被服と身体装飾の社会心理学(下巻) 北大路書房*pp*32-39
田村和子 2003 女性教師の服装に対する児童の認知 日本家政学会誌Vol.54 No.9 769-776.
寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 1992 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究,62,350-356.
敦賀麻理子・鈴木直人 2003 異なる課題による主観的反応の強度の差異の検討 同志社心理,50,22-31.
敦賀麻理子・鈴木直人 2005 “あがり”喚起時の精神生理学的反応の検討 感情心理学研究,12,62-72. s